

本の万華鏡

ヨオロッパの世紀末

推薦者 隈研吾(くまけんご)
 建築家 隈研吾建築都市設計事務所代表「コロンビア大学建築都市計画学科客員研究員、一九五四年横浜生まれ。東京大学建築学科大学院修了。宮城県登米町の能楽堂、森舞台」の建築で日本建築学会賞受賞、馬頭町広重美術館で村野藤吾賞・林野庁長官賞受賞、イタリアより、石の美術館でインターナショナル・ストーン・アーキテクチャー・アワード受賞。また、フィンランドよりスリット・オブ・ネーチャー 国際木の建築賞受賞。著書は、『反オブジェクト』(筑摩書房)、『新建築入門』(ちくま新書)、『負ける建築』(岩波書店)など。

吉田健一著 新潮社一九七〇年

高校二年の時にこの本に出会った。

その前から建築には興味があった。丹下健三、黒川紀章らのス
 ター建築家が東京オリンピック(一九六四年)、大阪万博(一九七
 〇年)で次々に建築をたてていく様子にあこがれていたのである。

そんな時に、この渋い本に出会った。一言でいえば、明るい近
 代」ではなく、「渋い近代」というものがあり方を教えてもら
 ったのである。「近代」というのが建築をパンパンたてるスクラッ
 プ&ビルドの時代ではなく、そこに昔からあるストックを、じっくり
 暖め、味わう、大人の時代」であることを教わったのであ
 る。著者の吉田健一は、イギリスに代表される『ヨオロッパの世紀
 末』を例にひきながら、その「大人の時代」「成熟の時代」の魅
 力を示してくれたのである。

いま振り返ってみればこの本は、まさに僕にとっての転機の本
 だっただけではなく、日本にとって転機の本だったような気がす
 る。時は一九七〇年。スクラップ&ビルドの高度成長が頭をうち、
 ストックとサステイナブルの成熟社会がやってきたのである。

とはいっても、「この「大人の時代」にどんな建築デザインが求
 められているのかは、高校生の僕には皆目見当がつかなかった。
 その答は、やっと最近になって見えてきたような気がする。

CEL



from editor's room

CEL編集部が推薦する参考図書

- 『都市にとって土地とは何か』前田昭彦他 筑摩書房(1988年)
- 『都市ストックを創る 豊かな都市の条件』インターシティ研究会編 学芸出版社(1992年)
- 『コミュニティ・ペースト・ハウジング』平山洋介 トムス出版(1993年)
- 『タウンリゾートとしての商店街』吉野国夫 学芸出版社(1994年)
- 『住宅建築のリノベーション』櫻野紀元他 鹿島出版会(1998年)
- 『都市のリ・デザイン』鳴海邦碩他 学芸出版社(1999年)
- 『現代のまちづくり 地域固有の創造的環境を』小暮宣雄他 丸善(2000年)
- 『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり』宗田好史 学芸出版社(2000年)
- 『団地再生計画 みかんくみのリノベーションカタログ』みかんくみ INAX出版(2001年)
- 『団地再生 甦る欧米の集合住宅』松村秀一 彰国社(2001年)
- 『性能時代の建築リノベーション 33事例に学ぶ改修のノウハウ』日経アーキテクチュア編 日経BP社(2002年)
- 『職住共存の都心再生』青山吉隆編 学芸出版社(2002年)
- 『都市のデザインマネジメント』北沢猛 + アメリカン・アーバンデザイン研究会 学芸出版社(2002年)
- 『コンバージョンによる都市再生』建物のコンバージョンによる都市空間有効活用技術研究会編著 日刊建設通信新聞社(2002年)
- 『わが家をエコ住宅に 環境に配慮した住宅改修と暮らし』濱 恵介 学芸出版社(2002年)
- 『リノベーション・スタディーズ』五十嵐太郎・リノベーション・スタディーズ編 INAX出版(2003年)
- 『リノベーション物件に住もう! 「超」中古主義のすすめ』ブルースタジオ編 河出書房新社(2003年)
- 『集合住宅のリノベーション』日本建築学会編 技報堂出版(2004年)
- 『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』橋爪紳也編 創元社(2004年)
- 『負ける建築』隈 研吾 岩波書店(2004年)
- 『ストック時代の住まいとまちづくり スクラップ・アンド・ビルドをのりこえて』梶浦恒男 彰国社(2004年)
- 『リフォームを真剣に考える』鈴木 隆 光文社(2004年)